

筑紫君磐井と継体天皇

- 相似墳からみた両者の関係 -

小澤 太郎

激戦の末、^{いわい}磐井は敗れた。西暦 527 年から 1 年半余りに及んだ古代最大の内戦「磐井の乱」の結末である。では、戦争に至るまでの筑紫君磐井と継体天皇とは、どのような関係だったのだろうか。最近の前方後円墳研究では、両者の意外な関係が浮かび上がってきている。

磐井の墳墓は岩戸山古墳、一方の継体の陵墓は^{いましろつか}今城塚古墳とされる。今城塚は全長 190 m、六世紀前半の前方後円墳としては全国一の規模だ。岩戸山は全長 134m で同じく全国第 3 位である。実はこの両者が「^{そうじふん}相似墳」だったのだ。岩戸山古墳は継体天皇陵と同じ基本設計図を用いて造営したのだろう。

このように今城塚古墳と相似墳の関係にある古墳は、他にもある。^{だんぶざん}断夫山古墳（名古屋市）などは代表例で、^{おわりのむらじ}継体の妻の父尾張連の墓とされる。いずれも継体の妻や外戚、支援者といった関係の深い人物の墳墓ばかりである。そして今城塚の大きさを 10 とした場合の比率は、断夫山古墳 8、岩戸山古墳 7、だが正妻である^{たしらかひめみこ}手白香皇女の西山塚古墳（奈良県天理市）は 6 に過ぎない。

継体は近江（滋賀県）出身の地方豪族で、いわば入り婿の形で即位した。中央における地盤が弱い彼を擁立・支援したのが相似墳に眠る人々であった。磐井も例外ではなく、その古墳の規模から尾張連に次ぐ功績があったものと想像する。

王宮を転々とし、ようやく大和入りした翌年、継体は磐井討伐を命ずる。擁立の功労者は斬殺されたとも豊前へ逃れたとも伝える。

* 『図説 南筑後の歴史』 2006 年 3 月、郷土出版社〔写真・図面割愛〕

- ・ 著作権は著者が所有します。引用の際は、出典を明示してください。
- ・ 個人の研究目的における利用以外の一切の複写を禁止します。